

勇払原野のこれまでとこれから

むらい・まさゆき

1959年稚内市生まれ、海洋汚染問題に関心を持ち、運輸省海上保安学校入学、1981年運輸省海上保安庁入庁。巡視船「ゆうばり」に乗船、流水の観測、海難救助、海洋汚染の防止等にあたるが、1986年民間での環境保護活動の道を希望し、財団法人野鳥の会職員となる。その後、野鳥の会を離れるが、1991年5月よりウトナイ湖サンクチュアリ・レンジャー、1995年よりチーフレンジャーとしてウトナイ湖の環境保全、環境教育、動植物の調査研究などを業務として活動。2000年に野鳥の会を辞し「ゆうふうつ原野自然情報センター」を開設。勇払原野にスタンスを置いて、環境学習の企画運営、自然環境調査、それらに関わる情報発信などを主体に活動している。

村井雅之

はじめに

大規模な自然環境の改変を伴う勇払原野の開発計画は二〇〇〇年ほど前から始まったが、未だこの原野を有効に活用できずにいる。その原因は、勇払原野の自然環境を観ず、地域住民を無視して進められてきた土地利用計画にあると考える。

新世紀、勇払原野の自然環境と文化を貴重な資源として捉え、「苫小牧東部工業基地」というイメージから「人と自然の共生する大地」へと変える土地利用計画が望まれる。

1、勇払原野の自然

勇払原野は、苫小牧から石狩浜に繋がる石狩低地帯の南部に位置し、苫小牧市、白老町、厚真町、早来町、穂別町、追分町、鶴川町の1市6町にまたがっており、かつてはサロベツ原野や釧路湿原に匹敵する道央最大の湿原であった。

この原野は今から約三五、〇〇〇年前に、支笏火山により噴出した火山灰が堆積し、その後海岸線の前進・後退、美々川、安平川、厚真川などの河川による流出物と樽前山、恵庭岳の噴火に伴う軽石、火山灰など降下物の堆積などの地史的過程を経て三、五〇〇年ほど前に現在の地形が形成された。現在残る湿原は一七三九年に堆積した厚さ40cm〜50cmの樽前a軽石降下層の上に形成されたもので、この二六、〇〇〇年間の間に堆積した厚さ20cm〜30cmの泥炭層が表層に形成され低層湿原から高層湿原に至る特異な植物群落を形成している。

勇払原野の自然環境は、沖積世低地と丘陵に大きく分けられ、沖積世低地に広がる湿原は、ウト

ナイ沼湿原の他、美々川湿原、弁天沼湿原などに代表される標高約1〜5mの平坦地湿原、及びトキサタマップ湿原やオタルマップ湿原のような標高約10m以下の谷筋湿原に分けられる。一方、周囲の丘陵は、支笏・樽前火山の山麓部をなす丘陵や夕張山地に連なる標高50m以下の丘陵で、おおむね台地状の緩斜面をなし連なっている。

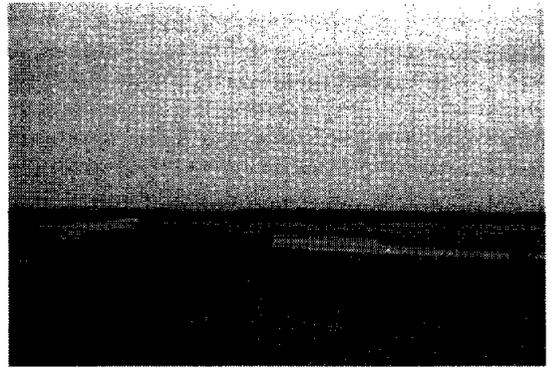
この勇払原野では一九七〇年以降、急速な工業基地開発や宅地開発などが進められ、勇払原野の原生的環境を見ることは難しい状況になっているが、唯一ウトナイ湖が原生勇払原野の自然景観を残し、原野の自然環境の変遷を垣間見ることのできる場所となっている。

ウトナイ湖は約三、〇〇〇年前の海岸線後退と砂丘列の発達により形成された海跡湖で、湖を含む周辺五一・三haは、苫小牧市の緑地保全地域であり、一九八一年には(財)日本野鳥の会が苫小牧市の協力を得て、日本第一号のサンクチュアリ運動展開の拠点とし、その後、国設鳥獣保護区特別保護地区、ラムサール条約登録湿地となるなど、国内外を問わず保全されるべき重要な環境として高く評価されている。

ウトナイ湖を含む勇払原野一帯には、二五〇種を超える野鳥や約四六〇種の高等植物、そして四、〇〇〇種を超える昆虫が生息している他、エゾシカやシマリス、キタキツネが多数生息していることはもちろん、最近では胆振地方と日高地方に生息するヒグマの corridor (回廊) 移動経路) 存在も確認され、都市近郊に残された貴重な自然環境であると共に、大型野生動物たちの重要な生息拠点であることが新たな視点からも認識され始めている。



トキサタマップ湿原



太平洋側から望む原野

2、これまでの勇払原野

四、五〇〇年以上前から勇払原野の台地周辺に縄文人たちが暮らしていたことが、現在の丘陵に残る大島貝塚、美々貝塚など多数の貝塚や静川遺跡などから伺い知ることができるが、この原野の自然環境と人との明らかな関わりは、北海道の先住民であるアイヌから始まる。勇払原野での漁労を中心とするアイヌ文化は、今から八〇〇年くらい前、日本史で言うところの平安時代から鎌倉時代に始まり、この地域一帯にアイヌ語地名が多数残っていると看做す。原野の自然環境と深く関わり、豊かな自然の恩恵を受け自然と共生した狩猟採集の生活を送っていたことが伺える。

しかしその後、勇払原野の自然環境と人との関わりは共生の時代から、開拓、開発という自然環境と対立する時代を迎える。

それは今から二〇〇年前（寛政12年）、広大な原野に八王子千人同心（武州多摩八王子千人町の同心）が開拓のくわを入れたときに始まる。

蝦夷地の警備と開墾のため勇払原野にやってきた八王子千人同心とその子弟たちは、鉄砲と鍬を手に火山灰で覆われた原野の開墾を進めたが予想以上の困難に遭遇し、慣れない気候と病気などにより多くの犠牲者を出し、僅か四年で断念された。しかし、その後も豊富な森林資源と水を求め明治四二年に王子製紙が原野の西端に製紙工場を建設し操業、工業による勇払原野開発の一步を印すと共に、大正二年より、再度積極的な農業開発が進められ、莫大な国費を投じて原野に農業用排水路が造られ、牧場や畑作地としての土地利用が計られた。しかし、この開発もまた勇払原野の過酷な自然環境の前に尽くうち碎かれ、農業開発は断念

された。

この間、勇払から今の苫小牧市中心街に開拓史が移ったり、現在の苫小牧市に道路や鉄道が整備される中で、開拓の中心地であった勇払地区の役割は終わりを迎える。そして、三度戦後の食糧難から政府の政策として、日本全国から入植者たちが、柏原、静川、弁天地区に入植したが、この開拓も戦前に入植同様に成功せず、昭和四六年に開拓団は解散し、以後、苫小牧市は日本で初めての掘込み式港湾を作り工業都市として歩むことになる。

三度失敗した農業開発の共通点は、過酷な勇払原野の自然環境を観ることの無く、中央の論理と都合のみを優先して進められた開拓計画にあったが、その後の原野の土地利用も過去の失敗に学ぶどころか、地域住民の声を無視し、国と経済界の都合を優先した苫小牧東部工業基地計画として進められた。それ以後この計画が破綻するまでの三十年間に渡り、勇払川の直線化、大規模な交通網の整備、千歳川放水路計画、ゴルフ場建設、FAZ計画など、様々な開発計画が進められ、原野に残された貴重な自然資源は急速に失われて行った。

3、これからの勇払原野

「勇払原野」と聞いて、どこにあるのか、どんな場所なのかをイメージできる人は北海道に住んでいる人間でもあまりいないが、「苫小牧東部開発地域」と言えばわかかってもらえる。それほど勇払原野には「工業地帯」というイメージが染みみている。

しかしこの開発計画は一九九八年に破綻し、遅々として進まぬ開発の影で、「広大な空き地」とい

弁天沼と苫東地域（苫東地域に係わる
環境影響評価書 平8北海道）



開拓団の入植跡（井戸）今に残る



開発が進むウトナイ湖周辺

イメージが定着していた原野に自然環境が戻り、失われると考えていた弁天沼や勇払川流域の湿原、平沼湖沼群、勇払原生花園、つた森林、谷筋湿原など豊かな自然環境が残された。そして自然環境の復元を象徴するように、長い間断たれていた日高と胆振のヒグマたちのコリドーも復活した。

勇払原野のヒグマのコリドー復活は、一頭の大きなオスグマ、通称「寅次郎」によって確認され、現在もその移動の様子を岩手大学に籍を置く青井俊樹教授（前北海道大学苫小牧地方演習林林長）を中心とした研究グループが追っている。そしてこの「寅次郎」の移

動経路に引きつけられるようにして、苫小牧や早来、穂別、鶴川など勇払原野の市町村では、森林の大切さに気づいた住民たちが中心となり「森作り」が始まった。

この森作りのネットワークを「トラ次郎ネットワーク」といい、微力ながら私が事務局の一翼を担っているが、将来この森作りが進み、クマたちの移動経路と人間の生活圏が分離され、コリドーを断つ道路建設などへの対策が取られれば、ヒグマとの共生も夢ではなくなるかも知れない。

これからの勇払原野に必要なのは、「トラ次郎ネットワーク」に関わる森作りのような、原野に住む人々自らが核となった自然との関わりであり、その関わりが成長し、中央の論理や思惑に翻弄されない地域の意志を持つことだと思ふ。それを実現するにはまず勇払原野に住む人々が足元の自然環境の素晴らしさ、大切さに気づくことが必要である。

訪れた新世紀、勇払原野の自然環境を貴重な資源と捉え、原野が「人と自然の共生する大地」へとイメージが変わることを願い、勇払原野に関わる情報を地域に向け今後も発信して行きたいと思ふ。